

研究ノート

死者儀礼アニメーロの変容と継続

— 儀礼の再興と中止からフォルクローレ・フェスティバルの演目化まで

上原なつき NATSUKI UEHARA

名城大学 MEIO UNIVERSITY

I はじめに

I-1 研究の目的

ペルー共和国アプリマック県アンタバンバ郡 A 村 (Provincia de Antabamba, Departamento de Apurímac, República del Perú) ではかつて、アニメーロ (*animero*) と呼ばれる死者のための行列が催されていた。カトリックの祭日「諸聖人の日」(Día de Todos los Santos) にあたる 11 月 1 日の日暮れとともにその行列は始まり、翌 11 月 2 日「死者の日」(Día de Todos los Muertos) の正午頃まで、夜を徹して歌い踊りながら村内を練り歩くというものである。中止されていた確かな年数は不明であるが少なくとも 2000 年から 2008 年までの期間、アニメーロの行列は実施されていなかった。2009 年にたった一度だけ再興したが、開催を予定していた翌 2010 年は再び中止となり、その後は一度も開催されることなく 2017 年現在に至っている。

本稿ではまず、アニメーロという習俗がどのようなものであるかを把握するために先行研究をまとめる。次に、現地調査のデータおよび DVD のデータをもとに A 村のアニメーロとそれにかかわる事柄について記述する。A 村のアニメーロに関する先行研究がないことからアニメーロが開催される諸聖人の日および死者の日に行われるその他の儀礼についても合わせて民族誌的記述を行う。また、死者の靈魂の危険性を回避するというアニメーロの役割を理解するために頭蓋骨と靈魂の関係性についても述べる。そして、アニメーロが再興したきっかけと再び中止になった背景およびフェスティバルの演目へと変化していく経緯を人々の発言から明らかにするとともに、この一連の出来事の背景にある A 村の他界観および死者観をふまえて A 村のアニメーロを考察する。

I-2 アニメーロに関する先行研究

I-2 (1) ペルーのアニメーロについて

本論に入る前にまず、先行研究からアニメーロという習俗が存在する地域の把握と、各地におけるアニメーロの内容を概観したい。アニメーロとは死者の日に行列を行う人物およびその行列をさす。筆者が実施したこれまでの現地調査で知り得た範囲では、ペルー国内でアニメーロを行っているのは本稿で論じるアプリマック県アンタバンバ郡 A 村と、名称は異なるが同様の習俗でパクパンキート⁽¹⁾ (*pacpanquito*) と呼ばれる死者の日の行列を実施している同県同郡の S 村、以上の 2 村のみである。ペルー国内のアニメーロに関する先行研究については、筆者がこれまで文献を調べた範囲では今のところ見当たらない。唯一、リカルド・パルマ (Ricardo Palma) による 19 世紀当時のペルーの文化・習俗につ

いてまとめた有名な著作『ペルーの伝統文化』(Tradiciones Peruanas) の中に、アニメーロについてごく短い記述が出てくる。

夜9時、消灯の合図とともに、色つきのケープを纏いランタンを手にしたアニメーロと教区の聖具納室係が外に出てきて、煉獄の聖なる靈魂のために、または我らが主のために祈り歩く。寝ずに起きている子供たちにとってこの人物は恐ろしい存在であった [Palma 2001:298]。

筆者が確認しているのはこの一文のみである。この短い一文だけでは、ペルーにおけるアニメーロの起源および19世紀当時どの程度の地域にアニメーロが存在したかは不明である。煉獄の靈魂のために祈るということから、少なくともカトリックに起因するかまたはその影響を受けた習俗であると考えられる。煉獄⁽²⁾ (Purgatorio) という他界観はカトリックのものであり、先スペイン期のアンデス地域にはなかった観念である。

I-2 (2) エクアドルのアニメーロについて

また、現在のエクアドルにおいてもアニメーロの習俗があることがわかっており、2点の先行研究が確認できた。パチェコ・ブラチョ (Pacheco Bracho) はエクアドル共和国インバブラ県カウアスキ教区 (Parroquia de Cahuasquí, Provincia de Imbabura, República del Ecuador) でアニメーロとして活動する男性へのインタビュー内容をまとめている [Pacheco Bracho 2010]。カウアスキ教区のアニメーロは10月25日から11月2日までの9日間 (novena⁽³⁾)、深夜12時に毎晩行われる。男性2名のアニメーロが頭巾付の白いチュニックを着用し、手にはロザリオ、人間の頭蓋骨、ハンドベルを携帯している。祈祷を唱え、ハンドベルを鳴らしながら墓地へと歩いていく。パチェコ・ブラチョのインフォーマントによれば、アニメーロとは人々に忘れ去られた煉獄の靈魂 (alma) を祈りによって活気づける者 (animador) であり、神が煉獄の靈魂に贖宥を与えて下さるよう働きかける役割があるという [Pacheco Bracho 2010:139-142]。

次に、ベロス・リオス (Veloz Rios) はチンボラソ県ペニペ郡 (Cantón de Penipe, Provincia de Chimborazo) のアニメーロについて当該地域住民へのアンケート調査を行っている。著者はソーシャル・コミュニケーション⁽⁴⁾ の視点から自治体を一種の企業と見做し、ペニペ郡の人々にとってアニメーロの習俗が共同体アイデンティティの形成にどのように関わっているか、アニメーロの歴史的背景や文化的重要性を人々がどのように認識し、地域の誇りに繋がっているか、また、アニメーロの観光資源化の可能性はあるかについて統計調査およびアンケート調査した結果をまとめている [Veloz Rios 2017]。ただし、著者自身はアニメーロについては参与観察を行ったわけではないようで、インターネット上の記事やニュース映像の引用をもとにその概要を述べているのみである。

インターネット上で確認できる記事およびニュース動画によると、ペニペ郡で行われているアニメーロは地区によって祈祷を開始する時期が異なり、10月15日、10月24日、11月1日となっている。頭巾付きの白いチュニック、ロザリオ、聖書、人間の頭蓋骨、ハンドベルを持っている。神、キリスト、マリアに対する聖歌を歌いながら教会前から始まり墓地へ向かって歩いていく。地区によってはアニメーロの後ろを人々が行列をなしてついて行く。アニメーロの一人は「私は祝別された靈魂の代理であり、このように靈魂と交流し、彼らに神のご加護を祈願するのである」 [Márquez 2014] と述べている [Márquez 2014; Teleamazonas 2015; Cevallos 2016; Jraudiovideo 2009]。

以上のことから、エクアドルのアニメーロは煉獄の靈魂を救うことを目的とした習俗であり、神が煉獄の靈魂を救済してくれるように祈祷および聖歌によってその執り成しを行うというものである。煉獄という観念と神への執り成しから、エクアドルのアニメーロの場合もカトリックを起源とするか、またはカトリックの影響を受けた習俗であると考えられる。

I-2 (3) スペインのアニメーロについて

さらに、現在のスペイン王国南部のムルシア自治州 (Comunidad Autónoma de la Región de Murcia, Reino de España) においてもアニメーロの習俗が存在している。ムルシア州のアニメーロは煉獄の霊魂を救済するといわれるカルメンのマリア (La Virgen del Carmen) の信心会 (hermandad) が担っている。死者の日とクリスマスに実施されるが、死者の日に活動するものをアウロロ (auroro)、クリスマスに活動するものをアニメーロと区別する地区もある。アウロロとアニメーロはどちらも煉獄の死者のためにマリアへの聖歌と祈禱を捧げるが、死者の日に活動するアウロロは男性のみで構成され、地面に置いたランタンを中心に円を描くように立ち並んで歌う。楽器は一本のハンドベルのみ、歌う場所は教会と墓地である。

一方、クリスマスに活動するアニメーロは男女で構成されており、ギターやバイオリンなどの伴奏に合わせて聖歌を歌う。また、歌うだけでなく踊ることもある。先頭を歩く人物がカルメンのマリアが描かれた旗を持ち、その後ろを歌いながら行列が続く。アニメーロは家々を訪問して歌と踊りを披露し、煉獄の霊魂のための寄付を人々に依頼する。いわゆる門付けである [García Martínez y Ayuso García 2013]。

以上の先行研究からアニメーロはスペイン、カトリックに由来し、植民地期にアンデス地域にもたらされた習俗と推測できるが、それを断定するには歴史的史料を渉猟する必要があるだろう。本稿はアニメーロの起源を明らかにすることが目的ではないので、ここでは先行研究の概要とアニメーロが実施されている地域とその内容を把握するだけに留めたい。

I-3 記述方法とデータ

以上に挙げた先行研究はそれぞれインタビューまたはアンケートを用いた社会調査のまとめ、または民俗学的データの網羅に終始しており、人類学的な理論に基づく分析はなされていない。そのため、本稿でアプリマック県アンタバンバ郡 A 村のアニメーロを論ずるにあたって当該地域の先行研究がないだけでなく、考察するにおいて議論の出発点となる理論的分析を行った先行研究もないのが現状である。このことを踏まえて、理論的分析については今後の研究で取り組むこととして、ひとまず本稿では A 村のアニメーロとそれに関連する事柄を中心に事例報告として民族誌的に記述し、最後に簡単な考察を加えるに留める。なお、本稿は 2010 年 4 月から 2011 年 3 月、2011 年 10 月末から 11 月初旬の約 2 週間、計 1 年間の当該地域でのフィールドワークで得たデータと、A 村在住の男性教師 D とその兄が製作した DVD から得たデータをもとに論じていく。

II 調査地概要

アプリマック県アンタバンバ郡 A 村は標高約 3,600 メートルの山腹に位置する農村で、人口はおよそ 2,000 人である。村の広場の周りには 17 世紀に建設されたカトリック教会を中心として、学校、役所、警察署、診療所、国立銀行の支店、小さなホテル、食堂、雑貨店数軒が並んでいる。また、県都アバンカイ (Abancay) との間を 15 人程度が乗車できるワゴン車のバスが一日に数本往復している。A 村は周辺地域の中心地としての役割を果たしており、近隣からの人の往来も多い。農業以外の産業はなく、村内で現金収入が得られる職業は役所職員や教員などの公務員、または食堂や雑貨店の経営など小規模の商業に限られている。それ以外の人々は農業による自給自足を基本としながら都市への出稼ぎ、建築や道路工事などの不定期な労働による現金収入などで生計を立てている。近年は都市や海外への出稼ぎおよび移住も増加傾向にあるようである。

Ⅲ アニメーロの再興

Ⅲ-1 アニメーロの DVD

筆者が A 村にアニメーロという習俗があると知ったのは全くの偶然であった。2010 年 10 月、A 村での調査中に食事をするために入った食堂でたまたまアニメーロの DVD が上映されていたことがこの習俗を知るきっかけであった。

DVD の映像には背中に髑髏が描かれた黒いマントをまとい、三角錐の黒い帽子を被った男性数人と、黒いブラウス、黒いスカート、黒い肩掛けを身に着けた女性たちが歌い踊っている姿が映っていた。踊っている男性のうちの一人が人間の頭蓋骨を手にとっていた。その食堂で働いていた女性に尋ねたところ、DVD に映っていたそれらの人物および行列は死者の日のアニメーロと呼ばれる習俗であるという。また、この DVD は食堂から数軒隣の雑貨店で販売されているとのことであった。

その翌日、アニメーロについて詳しく知りたいが誰に聞けばいいかと筆者が宿泊していたホテルを経営している女性に相談したところ、月曜日の朝に墓地に行けばカントール (cantor) と呼ばれる人物がいるのでその人に尋ねるのがよいと助言された。

Ⅲ-2 月曜日の墓参りにて祈禱を担うカントール

ホテル経営者の女性との会話から、A 村には毎週月曜日の午前中に墓参りをする習慣があることがわかった [上原 2013:50-52]。そして、毎週月曜日の午前中にはカントールという人物が墓地にいるのだという。カントールとはスペイン語で歌手を意味するが、A 村では墓地で死者のためにカトリックの祈りをあげる人物をさす⁽⁵⁾。月曜日の墓参りに訪れた人々はカントールに少額の寄付を渡し自分の家族や親族の墓前で祈ってもらう。教会で執り行う葬儀のミサでは神父が死者への祈りを捧げてくれるが、A 村独自の習慣である毎週月曜日の墓参りには神父は来ないため、カントールが祈りを捧げる役目を果たしている⁽⁶⁾。

カントールは村内に数人いるが、毎週必ず墓地にいるカントールは 50 代男性 B だけであった。B はカントールとして活動する際には必ず胸元にカトリック伝道者カテキスタ⁽⁷⁾ (catequista) の身分証を着け、首にはロザリオ、着用しているベストのポケットにはカトリックの祈禱集、反対のポケットには聖水⁽⁸⁾ の入ったペットボトルを持ち歩いていた。

カントール B とその近くにたまたま居合わせた墓参りに来ていた男性数人に、アニメーロについて詳しく教えてほしいと筆者が尋ねると、男性教師 D がそのことに詳しいと教えてくれた。彼らによれば、DVD に映っているアニメーロを組織したのが教師 D だということであった。次に、教師 D へのインタビューで得られたデータを中心に述べていきたい。

Ⅲ-3 教師 D へのインタビューと DVD 制作の目的

2009 年のアニメーロの開催を組織したという男性教師 D にインタビューを行った。D は A 村出身の 30 代男性で数年前まで首都リマに住んでおり、息子の一人が喘息を患っていたため数年前に故郷の A 村に家族で戻ってきたという。現在は A 村の学校で教師として歴史を教える傍ら、村の祭りや習慣について個人的に調べているのだという。未出版であるがクリスマスに開催される A 村の代表的な祭りのひとつであるワイリア (waylia または huaylia) についての論考を書いているということであった。

アニメーロが映っていた DVD について尋ねると、それは D の兄が撮影し販売しているものであり、ナレーションは D が担当したという。D の兄はリマで映像制作会社をしていて、この DVD を制作した目的は A 村の様々な習慣を記録し、リマやアレキパなどの都市またはスペインなど海外に移住した者や出稼ぎに行っている A 村出身者らに販売するためだという。教師 D の兄は現在リマに住んでいるが、祭りや行事のたびに帰郷し撮影を続けているという⁽⁹⁾。

Ⅲ-4 アリエーロの頭蓋骨

DVD制作の経緯だけでなく、DVDに収録されていたアニメーロについても教師Dは教えてくれた。アニメーロは死者のために歌い踊る人物およびその行列をさし、11月1日の「諸聖人の日」の夜から11月2日の「死者の日」の正午まで夜通し行列を続けるのだという。アニメーロの語源はアニマ(ánima)に由来し、アニマとはスペイン語で靈魂、特に死者の靈魂、煉獄にある靈魂を意味する。Dによればアニメーロは村の昔からの習慣(costumbre)であるが、この50年ほどは行われていなかったという⁽¹⁰⁾。

Dとその兄は村の古くからの習慣を途絶えさせるわけにはいかないと、アニメーロの開催を呼びかけて有志を集め、長らく行われていなかったアニメーロを2009年に再興させたのであった。また再興に際して、Dは村の年寄りなどに話を聞いてできる限り昔の通りにアニメーロを再現したのだと語った。

DVDの映像の中でアニメーロとして踊っていた男性の一人が手に持っていた頭蓋骨は実際の人骨で、それはDの祖父の頭蓋骨であった。アニメーロを行うためにDが祖父の墓から頭蓋骨だけを取り出してきたという。D曰く、アニメーロに使用する頭蓋骨は誰のものでもよいわけではない。生前、優れた人格であった人物のものでなければいけないのだという。Dの祖父は生前アリエーロ(arriero)として村のために働き、村の人からの信頼も篤かったそうである。

アリエーロとは馬やロバのキャラバンを率いて遠方まで旅をして交易を行うことを生業とした牧童であるという。A村にトラックや大型バスの通行が可能な道路が整備されたのはフジモリ政権時代(1990~2000年)であり、それまでは村への物資の運搬や交易を主に担っていたのがアリエーロだったそうである。アリエーロは隣県のクスコ県やアレキパ県までいくつもの山を越えて何週間もかけて旅をし、村に必要な様々な物資を持ち帰ったのだという。また、アリエーロはコロプーナ⁽¹¹⁾(Coropuna)までの道のりを知る唯一の人物でもあった。

D曰く、A村ではアニマは死後、コロプーナと呼ばれる雪山の山頂に赴くと考えられているそうである。そこには死者の家があり、死者は何不自由なく暮らしているという。アニマはそのコロプーナから諸聖人の日の夜に村へと戻ってきて、死者の日の正午頃まで村に留まる。そして、日暮れとともに再びコロプーナに戻っていくという。

Dによればコロプーナは万年雪を頂く極寒の高山であるため、生きている人間は決して山頂に辿り着くことができないという。コロプーナまではアンタバンバ村からは徒歩で7日間かかるほどの遠方にあるため、村の人々は誰も実際にその山の姿を見たことはないのだそうである。唯一、アリエーロだけがアレキパ県まで旅をするため、コロプーナの麓を通るのだという。つまり、アンタバンバ村からあの世とされるコロプーナまでの実際の道のりを知っているのは、村内ではアリエーロ以外にいないのである⁽¹²⁾。アニメーロで使用する頭蓋骨はどれでもよいわけではなく、あの世までの道のりを知るアリエーロの頭蓋骨を使用するということが重要な意味があるといえる。

インタビューの途中、Dが居間にある棚を指さしながら、「去年、アニメーロをした時には祖父の頭蓋骨はそこに置いていたのだ」と筆者に言った。そして真剣な面持ちで「アニメーロで頭蓋骨を使用する際、頭蓋骨の側には常に誰かがいなければいけない。もし、たった15分でも誰もいない部屋に頭蓋骨をそのままにしておくと、それはタイタママ(taytamama)に変わってしまうのだ」と言った。次に、Dが語るこのタイタママとは何であるかについて述べていきたい。

Ⅲ-5 危険な靈魂タイタママ

タイタ(tayta)とはケチュア語で父を意味し、ママ(mama)とは母を意味する。つまり、「タイタママ」で両親を意味するので、筆者が「両親ということか」とDに尋ねたらとそうではないという答えが返ってきた。D曰く、タイタママとは不可視の危険な存在のことである。タイタママは夜に現れ、それに出会うと生者は死んでしまう。日常的にこのタイタママは夜に現れることがあるが、11月1日の夜は特にタイタママが現れやすく危険なのだそうである。また、幼い子供はタイタママに捉われやすい。タイタママに出会った子供は突然激しく泣き叫んだり、暴れ出したりするなど様子がおかしくなるのだと

いう。

タイタママは不可視だが暗闇のなかで人影として見えることがある。また、夜中に屋外から「うーうーうー」と人のうめき声のような、何を言っているのか理解できない不明瞭な話し声が聞こえたり物音がしたりすると、それはタイタママである。その声や物音を聞いて夜に誰か知り合いが訪ねてきたのかと思っとうっかりドアを開けてしまうと、そこにタイタママがいるそうである。また、夜中に誰もいない暗闇に向かって犬がさかんに吠えている時も、やはりそこにはタイタママがいる。そのため、夜は外から声や物音がしても決してドアを開けたり外に出たりしてはいけないということであった。

タイタママは非常に危険な存在であるが、11月1日の夜、アニメーロがアリエーロの頭蓋骨を持って夜通し村中を歌い踊って練り歩けばその危険は回避できるのだとDは語った。

つまり、不可視のタイタママはどこで出くわすかわからない危険な存在であるが、アニメーロが持つ頭蓋骨によってタイタママは導かれてその危険性を封じることができるのである。しかしひとたび、頭蓋骨を無人の場所に置きっぱなしにしてしまうとタイタママが現れ、危険な状態に陥ってしまう可能性があるということである。死者の霊魂が村に帰郷するという11月1日の夜は特にタイタママが現れやすいと考えられていることから、タイタママとはすなわち死者の霊魂を意味していると考えられる。ではなぜ、タイタママはアニメーロが持つ頭蓋骨に導かれ、また、その頭蓋骨が無人の場所に放置されると危険なタイタママとして現れるのであろうか。これには霊魂と頭または頭蓋骨との関係性について理解する必要がある。

III-6 霊魂と頭の関係性

Dへのインタビューから少し逸れるが、ここで頭蓋骨と霊魂との関係性を示唆する事例をいくつか紹介したい。結論を先取りすれば、アニメーロが頭蓋骨を持って歌い踊る理由とは、霊魂が頭蓋骨に宿るといふ霊魂観に由来するからである。

先述のインタビューとは別の日に、筆者、教師D、Dの妻の3人で先スペイン期に墓地として使用されていたA村周辺にある洞穴を訪れたときのことである。その日はとても暑かったので日除けのために3人とも帽子を被っていた。険しい山道を登りもうすぐ目的の洞穴に着くというとき、筆者が汗を拭うために帽子を取った。その時、すかさずDが「ワイラ・マチュ (*wayra machu*) が入るから帽子を取るんじゃない」と筆者に厳しい口調で注意した。なぜなら、死者のいるところからは死者の風ワイラ・マチュが吹くとされ、その風に触れると死に至るからだという。教師Dとその妻はワイラ・マチュを恐れて、洞穴の近くまで辿り着くと、「私たちは洞穴の中を見ることはできないのでここで待っているから、君一人で確認してきてくれ」と筆者に言った。

このワイラ・マチュはアンデス地域では一般的によく聞かれるものであり、ワイラは風を意味し、マチュは古いまたは老人を意味するが、ここでいう老人とはすなわち死者を指す[上原 2014:108]。筆者はそれまでただ単にそのワイラ・マチュが体に触れると危険なのだ認識していたが、この一件から特に頭がワイラ・マチュの影響を受け易いこと、さらにワイラ・マチュが「入る」という表現から、頭を介してワイラ・マチュが体内に入るとDとその妻が考えていることを理解した。

さらに別の事例も紹介したい。筆者がA村で雑貨店を営む20代女性Nと共にとある人物の通夜に参列したときのことである。Nのような村の若い女性たちはTシャツにジーンズなど欧米の服装をしており、髪は下すかまめ髪にしていて、普段から帽子を被ることはほとんどない。また、通夜は夜に行われるので日除けのための帽子は当然ながら必要ない状況であったため、Nはその時、帽子を被っていなかった。一方筆者は、その日は昼から出歩いていたので日除けのための帽子をたまたま被っていた。出かけようとしていたNに対して、Nの母親が「通夜に行くのだから帽子を被りなさい」と注意し、Nはうっかり忘れていたという表情をして急いで帽子を被った。服装はいつも通りのTシャツにジーンズであったから、通夜のための喪服や正装という意味合いで帽子を被るように注意したとは考えられなかった。つまり、通夜や葬儀の場合もワイラ・マチュが頭から入ってくることを防ぐために帽子を被る必要

があると考えられる。

またもうひとつ、霊魂と頭の関連性を示唆する事例がある。筆者はA村から車で50分ほどのところにあるJ村で調査をしていた際に、子供の帽子に木の実のようなものが縫い付けられているのを見たことがあった。筆者が「それは何か」とその子の母親に尋ねると「お守りである」という。

なぜ帽子に縫い付けられているのか、その時は特に疑問に思っていなかったのであるが、その後、別の人から子供の霊魂は体から遊離しやすいという話を聞いた。また先述したように、Dのインタビューによれば子供はタイタママに遭遇しやすいということであった。つまり、子供の霊魂は肉体から遊離しやすく、タイタママにも遭遇しやすい。そのような子供に対するお守りを帽子につけるというのは、霊魂が頭に宿るまたは頭を出入り口として霊魂が出入りするものと考えれば納得がいく。

他にも、泥棒などから家屋を守る魔除けとして頭蓋骨を家に祀る習俗はペルーで広く見られる。クスコで聞いた話によれば、家の中に頭蓋骨を置いておくと誰もいない時に頭蓋骨がうめき声を出すので、それを聞いた泥棒は家の中に人がいると勘違いして何も盗まずに立ち去るといふ。クスコではこの頭蓋骨のことをアルミータ (almita) すなわち霊魂と呼んでいる [上原 2014:110]。

ワイラ・マチュが霊魂そのものを指しているかどうかは先行研究などさらにデータを集めて検討する必要がある。また、タイタママとワイラ・マチュにどのような差異があるのかはこれだけの事例では判断しがたい。しかしいずれにしても、死者の霊魂がコロプーナから村に帰郷する死者の日にタイタママが現れやすいこと、アニメーロがコロプーナまでの道のりを知る唯一の人物アリエーロの頭蓋骨を使用すること、無人の部屋にその頭蓋骨を放置すればタイタママが現れるというDによる発言の背景には、タイタママとはすなわち死者の霊魂をさし、その霊魂が頭蓋骨に宿るといふ霊魂観があると考えられる。そして、アニメーロが持つ頭蓋骨に死者の霊魂タイタママが宿ることによって、タイタママは自由に浮遊して生者の頭に入ることができなくなる。結果的にタイタママが生者をあの世に道連れにすることを防ぐことができるのだと考えられる。

III-7 今際の霊魂の危険性

再び教師Dへのインタビューの内容に戻ろう。なぜDはアニメーロの再興に尽力したのであろうか。先述したように、Dは村の習慣を途絶えさせないためとその理由を語った。Dは歴史の教師であるから、古くから伝わる伝統文化や習慣といったものに関心があるのは当然ともいえる。しかしそれだけではなく、D自身がタイタママの危険な力を信じ、心から恐れているということも見逃すことはできない。次に、Dの妻が語った祖母の死とタイタママにまつわる体験談について述べていきたい。

ある夜、Dの妻が部屋で寝ていると、別室で寝ているはずの祖母に腕をつかまれた。驚いた彼女は、祖母につかまれた腕と反対の腕で枕元の壁をどんと激しく叩き、必死に助けを求めた。異変に気づいた家族が寝ていた彼女を呼び起こして助けてくれた。彼女がうなされていたちょうどその時、彼女の祖母が亡くなったという。別の部屋に寝ていた祖母が彼女の部屋にいるはずはなかったが、Dの妻はその時確かに祖母のスカートをはいた人影を見たと言ふ。亡くなる直前に祖母が自分のところに現れたのだろうと語った。Dの妻によれば、人は亡くなる時に家族や親しい人物のもとに現れ、一緒にあの世に連れて行くことがあるからだそうである。

また、D自身も妻と同じような体験をしたことがあると語った。ある夜、Dの母親の友人が家に訪ねてきて、母とその友人は台所でおしゃべりをしていた。その時Dは別の部屋で寝ていたが急に苦しくなりうなされ始めた。その異変に気づいた家族がうなされていたDを起してくれて、Dは悪夢から目覚めることができた。その数日後、元気だったはずのDの母が急死した。Dの母は健康であったにもかかわらず、亡くなる直前に原因不明の腹痛を訴えていたのだという。D曰く、タイタママに遭遇した人は骨が痛み出して痛い箇所から小さい骨がとび出てくるか、または原因不明の腹痛が起こるなどして徐々に弱っていつてやがて死んでしまう。「母はおそらくあの夜、運悪くタイタママに出会ってしまったのだろう」とDは言った。Dと彼の妻は家族の死とそれぞれの実体験から、タイタママの存在を確信している

様子であった。

村の習慣を途絶えさせないこと、村の習慣を DVD に記録することが D とその兄の目的であったことは確かである。しかしそれだけではなく、タイタママという死者の霊魂の危険性を信じ畏怖するからこそ、D はアニメーロの必要性を信じ、再興に尽力したのだといえる。

IV 死者の日に行われる死者儀礼

IV-1 死者儀礼スーヨ

次に、件のアニメーロおよび諸聖人の日と死者の日とに執り行われるその他の死者儀礼について述べる。少々冗長な内容ではあるが、先述したようにアニメーロに関する先行研究がないことから、民族誌的にアニメーロに関連する周辺の事柄についても記述していく。アニメーロは 2009 年にただ一度だけ復活したが、筆者が現地調査を行った 2010 年には再び中止となったため、筆者は直接アニメーロを観察することができなかった。そこで、教師 D とその兄が撮影した DVD のアニメーロの映像、教師 D へのインタビュー、および筆者の観察データを合わせて論じていく。

先述したように、諸聖人の日の夜から死者の日の正午にかけて、全身黒の衣装を身にまとったアニメーロの男女が歌い踊りながら村を練り歩すが、楽器による伴奏はない。男性が口笛を吹き、女性が歌を歌う。諸聖人の日の夜にはアニメーロは道々を練り歩くだけでなく、各家で行われているスーヨ (suyo) を訪問する。

スーヨとは、諸聖人の日の夜に帰郷した死者を迎えるための死者儀礼である。スーヨについては筆者が 2010 年に実際に観察した内容をもとに記述していく。

前年の死者の日を起点に、その年の死者の日までの一年間に亡くなった人がいた家では、11 月 1 日の夜にスーヨが行われる。まず、諸聖人の日の午前中から昼過ぎまでの間に、人々は墓地に行って墓の掃除をする。A 村の墓の形態は主に 4 種類に分類できる。1) 穴を掘った地中にそのまま棺を納める土葬の個人用の墓、2) コンクリートで造られた墓に納める個人用の墓、3) ドアで施錠できるようになっているコンクリート製の建物で内部に 3 つから 6 つほど複数の棚があり、それぞれの棚に棺を納める家族用の墓、4) 村が建設・販売している一面が多数の棚になったコンクリートの建造物で集合型の墓、以上の 4 種類である。4) の集合型の場合、個人が村から棚を購入しその棚に棺を納める。墓地の面積は限られているため、1)~3) タイプの墓に比べて 4) の集合型の墓のほうがより多くの棺を埋葬することが可能となるため、周辺地域に比べて人口の多い A 村ではこの集合型のタイプが多い。

いずれの墓の場合でも、一年以内に亡くなった故人の墓はまだ仮の状態であるため墓標や装飾が施されていない。土葬の場合は土が盛られて花とろうそくが供えられているだけか、土葬以外の墓の場合はレンガとコンクリートで入口が塗り固められているだけである。故人の氏名や命日が刻まれ遺影が埋め込まれた石板などの墓標や十字架を墓に備え付けるなどして、死者の日までに墓が完成される。この日は花などで墓を飾り付けることはせず、ろうそくだけを墓前に灯して、日が暮れる前には人々は墓地を出て家に戻る。

墓地から家に戻ると、死者の霊魂を迎える儀礼スーヨのための祭壇を準備する。故人の遺影、カトリック聖人のイコンや十字架、花、故人が生前に好んでいた飲食物、カーニャ⁽¹³⁾ (caña)、チチャ⁽¹⁴⁾ (chicha)、ろうそく、タバコ、タンタワワ⁽¹⁵⁾ (t'anta wawa) が供えられる。翌日の朝、祭壇に供えた飲み物が前日より減っていると死者が帰ってきた徴だという。

諸聖人の日の夜、故人の親族や知人はやかんや大きなプラスチックボトルに入れたマテ・マチュ⁽¹⁶⁾ (mate machu) やコチャ (qocha) を持参してスーヨを訪ねる。温かい茶に砂糖をたっぷり入れたもので普段飲むマテとなんら変わりはないが、スーヨでは特にマテ・マチュと呼ぶ。また、チチャ (chicha) はスーヨの際は特別にコチャ⁽¹⁷⁾ と呼ぶ。このようにスーヨでは通常とは異なる特別な語を使用しなければいけない。同様にココ (coca) の葉はソラ (sora)、カーニャはチュヤ⁽¹⁸⁾ (ch'uya) と呼ぶ。

参列者らは互いに持参したマテ・マチュ、コチャ、チュヤ、ソラ、タバコを延々と互いにふるまい合う。酒、タバコ、コカは魔除けの力があるとされ、普段は酒やタバコを嗜まない者もこの時は男女とも積極的に摂取する。このように互いに酒、コカ、タバコをふるまい消費する光景は通夜や葬儀の時にもみられ、アンデス地域では一般的にみられる習慣である⁽¹⁹⁾。

IV-2 死者儀礼ピスカスカ

スーヨではピスカスカ⁽²⁰⁾ (*piscasca*) というサイコロ遊びに似た儀礼が行われる。名称やサイコロとして使用する材料は各地で異なるが、通夜の際には同様の儀礼がアンデス地域で広く行われている [稲村 1985]。

A 村ではピスカスカを行うために 6 粒のソラマメが用意される。豆粒を二つに分けて計 12 個の半粒にする。豆の片側をマジックペンで黒く塗りつぶすか、または黒い十字架を書く。祭壇の前の床にマンタ (*manta*) と呼ばれる布を敷き、その横にピスカスカを執り行う男性が座る。ピスカスカを執り行うのは、親族のなかでやり方を熟知している年配男性か、または先述したカントールである⁽²¹⁾。カントールの側には補助役として親族の中の若い男性が一人か二人座り、年配者と若者のペアで儀礼が執り行われる。

遺族と参列者は一人ずつ順にピスカスカを行う。床に広げたマンタの前に座り、12 個のソラマメを手にとると、マンタの上にそれらを一度に投げる。10 または 12 面、同じ面が出れば、死者とその人物の関係は良好、または死者の旅路は順調であるとされる。10 以下だとあまり良くない兆しとされる。一回投げごとにカントールによる祈りが捧げられ、補助役の若者と豆を投げた参加者がカントールの祈りの言葉を繰り返す。再び参加者が 12 個のソラマメを手を持つと次は一つずつマメを投げ、祈りをあげる。補助役の若者がマメを拾いあげ、十字架の面を上にして面を揃えて三つずつ並べていく。一通り終わると、次の参列者がマメを投げる。途中、休憩をはさみながらもこのピスカスカは夜明けまで延々と続けられる。

先述したように、諸聖人の日の夜はタイタママに遭遇しやすいため、外を出歩くのは危険なので外出は控えたほうがよい。しかし実際は、村の人々はスーヨを行っている親戚や知人の家々を一晩のうちに次々に訪問しなければならないので、夜中だというのに暗闇の中、あちこちで村の人たちが忙しく行き来していた。また教師 D によれば、2009 年にアニメーロを行った際はスーヨが行われている全ての家をアニメーロが訪ねたという。

スーヨに参列した人々は夜が明けるまでピスカスカを続け、酒やタバコを消費し続けた。そして人々はそのまま一睡もせずに翌朝、今度は墓地へと移動した。

IV-3 死者の日の墓参り

翌 11 月 2 日の朝、人々は墓地に向かった。墓地の前には普段はない露天商や屋台が数軒並んでいた。墓に供えるための花、タンタワワ、ビニール製の花輪、飲食物などが売られていた。人々は前夜に家の祭壇に並べていた品々を墓地に供え直し、足りないものは露天商で新たに買い足すなどしていた。

墓地内では神父による死者の日のためのミサが行われた。通常ミサは教会で行われるが、死者の日だけは特別に墓地にて行われる。この日はミサの後、神父もカントール同様に各墓の前で祈りを捧げる様子が見られた。この日のミサを担当した神父はこの地域周辺の出身者であったため、村の祭りや習俗にも理解があった。

墓地の中で一際目を引いたのはある若い女性の墓であった。墓前には光沢のある美しい真白な布で覆われた祭壇が準備され、可愛らしい熊のぬいぐるみとラジカセが置かれていた。子供や少女の墓前にはおもちゃやぬいぐるみなどが供えられるので、その墓に眠る人物はまだあどけないうら若き女性であったであろうことがわかった。ラジカセからは彼女が生前好きだったという若者に流行のダンスミュージックが大音量で流され、陽気でダンスブルな音楽が鳴り響いていた⁽²²⁾。

また、別の墓では遺族が死者への哀悼を即興で歌うアヤ・タキ⁽²³⁾ (*aya taqui*) が行われていた。泣き

ながらアヤ・タキを歌う未亡人と思しき女性の歌声はとても悲痛な響きであった。しかしながら、墓地の全体的な雰囲気には悲しさはなく、華やかで騒がしいものであった。各墓前には色とりどりの花、ビニール製の花輪、愛らしいタンタワワなどが供えられ、子供たちは墓の上を駆けまわって遊び、大人たちはこの日も酒を飲み続けていた。

死者の日にはカントール B を含む 3 人のカントールが墓地にいた。カントールらはそれぞれ、依頼が来た順に各墓で祈りを捧げ忙しく墓地中を歩き回っていた。寄付金とは別にこの日は供え物のタンタワワや飲み物もカントールにお礼として渡されていた。

墓地の前の広場には丸太と黒い布で作ったテント⁽²⁴⁾が広場を囲むように塀に沿ってずらっと立ち並び、日陰が作られていた。各テントには遺族が用意したビールケースが置かれていた。A 村ではビールを日常的に飲む習慣はないが、祭りや儀礼の時にはチチャ、カーニャとともによく消費される。墓前で酒を飲み続けるのではなく、カントールに墓で祈りをあげてもらい終わると早々に墓地前の広場に移動して、黒テントの下で酒を飲み始めた。

人々は昼過ぎまで墓地の前の広場で飲み続けたが、前日とは異なりそのまま夜まで飲み続けることはない。昼過ぎのまだ日が高いうちに全ての人が墓地をあとにした。D によれば、日が暮れると死者はコロプーナへ戻っていくので、生者が夜まで墓地にいればあの世に道連れにされるからだという。また、葬儀や死者の日に墓地を訪れる際、行きと帰りは異なる道を通らねばならないとされている。

IV-4 死者の日のアニメーロ

死者の日のアニメーロについては、DVD の映像と教師 D の話を元に 2009 年に実施された際の内容を記述する。

死者の日の午前、アニメーロらはまず村の中央の教会の入り口前で歌い踊った。その後、葬儀の時に葬列が進むのと同じ道順で、教会から目抜き通りを進み、歌い踊りながら墓地へと移動していった。アニメーロらは黒いテントが立ち並ぶ墓地前の広場へ歌い踊りながら入場した。この時も踊り手の男性一人が頭蓋骨を持って踊っていた。そして、アニメーロたちは広場の奥にある岩へと進んでいった。D の解説によれば、この岩はパヤ・ルミ⁽²⁵⁾ (*paya rumi*) と呼ばれる。パヤ・ルミはもともと墓地の入口にあったそうだが、現在は墓地前広場の奥にある検死室の脇へと移動されていた。かつてパヤ・ルミがあった墓地入口前の場所にはコンクリート製の十字型の台座が設置されている。この十字型の台座は埋葬の前に棺をそこに置き、最後の祈りを捧げるために使用されるものである。パヤ・ルミには丸いくぼみがあり、それはちょうど頭蓋骨がひとつ入る大きさになっている。アニメーロはそのくぼみに持っていた頭蓋骨を入れてその前に灯したろうそくを捧げ、再びパヤ・ルミの前で歌い踊った。DVD の映像はここで終わるが、D によればその後、最後の祈りをあげ頭蓋骨をもとの祖父の墓に再び埋葬して、アニメーロは終了したということであった。

ここまでは A 村の死者の日に行われる儀礼とアニメーロによる行列の内容について民族誌的に記述した。次章では、2009 年にアニメーロが再興したにもかかわらず、2010 年に中止になった背景について述べていきたい。

V アニメーロの中止

V-1 「悪魔的なもの (diablado)」という噂

先述したように、教師 D は村の習慣を途絶えさせないため、2009 年に有志を集めアニメーロを再興させたと言った。ではなぜ、長年行われていなかったアニメーロが 2009 年に再興したにもかかわらず、その翌年以降も継続的に開催されなかったのであろうか。D によれば、2009 年の段階ですでに 2010 年の開催を予定していて、次のマヨルドモ⁽²⁶⁾ (*mayordomo*) も決定していたが、結局は中止になってしまったのだという。

Dは2010年のアニメーロが中止になったということは筆者に語ってくれたが、中止の理由についてはなぜかわからない、次のマヨルドモを予定していた人物ができないと言い出したからであると語り、詳しくは教えてくれなかった。

後日、A村の教会前の目抜き通りの路上にて、いつもゼリーや菓子売っている顔見知りの女性2人に話を聞くと、アニメーロは「悪魔的なもの (diablado)」であるという。なぜなら、アニメーロを行うと人が亡くなるからだそうである。女性たちが曰く、2009年の死者の日にアニメーロを行った後の一年間には、例年よりもはるかに多くの村人が亡くなったのだそうである。前年の死者が7人ほどだったのに対し、この年はその倍近くの村人が亡くなったという。そのため、村の人々はずっと行われていなかったアニメーロを再興させたことが例年より多くの死者が出た原因だと噂しているのだという。彼女たちは人の往来の多い目抜き通りで商売をしていて、通りがかった人々といつもおしゃべりしているため、村の情報や噂話に詳しくかった。

さらにそのような噂の決定打となったのは、ある女性の突然の死であった。アニメーロの踊りの輪の中心で頭蓋骨を持って踊っていた男性が2009年のマヨルドモであったが、その男性の娘、当時大学生だった若い女性が健康であったにも関わらず突然亡くなったのだという。その娘とは、先述した死者の日の際に陽気なダンスミュージックが流れていた墓に埋葬された若い女性のことであった。彼女は健康でそれまで何一つ病気になったことはなく、亡くなる前日もいつも通りに元気な様子だったそうである。大学に通うために彼女は家族と離れてクスコで暮らしていた。いつもと変わらないある朝、彼女は突然亡くなったのだという。

「その日、彼女の枕元に現れたのだ」と女性たちは語った。若い女性の枕元に現れたものが何だったのかは明言しなかったものの、女性たちがタイタママを示唆していたのは明らかであった。その「何か」がマヨルドモの娘の元に現れたために、若く健康だった娘が突然亡くなってしまったのだという。そしてその「何か」すなわちタイタママが現れたのは、父親がアニメーロに参加し頭蓋骨を持って踊ったことに原因があると女性たちは考えていた。そのため女性たちは、アニメーロは「悪魔的なもの」であると筆者に語ったのであった。後日、少女の親戚という年配の女性に対し、筆者がそれとなく少女の死因を尋ねるとやはり同様の答えが返ってきた。

教師Dがアニメーロを行うことでタイタママの危険を回避できるのだと語ったのに対し、女性たちはアニメーロが原因でタイタママが現れてマヨルドモの娘は亡くなったのだと語った。両者の意見は全く正反対であった。

V-2 死者の続出

女性たちから上述の噂について聞いた後、教師Dに「今年(2010年)のアニメーロが中止になったのは、アニメーロを行うと死者が出ると噂されているからなのか」と筆者が聞くと、「それは間違いである」とDは答えた。アニメーロはタイタママの危険性を回避するものであり、むしろ死者が出るのを抑制するのだという。今年(2010年)、アニメーロを開催しなければさらに多くの死者が出るかもしれないとDは筆者に語った。

そして、アニメーロが中止になった2010年の死者の日の後すぐに、立て続けに3人の死者が出た。一人は中年の男性でもともと病気を患っていたそうである。残り2人は母と娘で、バスの事故により亡くなった。その父親も数か月前に亡くなったばかりだったという。娘が結婚して遠方に嫁いでいたので、母娘でバスに乗って嫁ぎ先の村に向かっていた際の不慮の事故であったという。娘の葬儀は嫁ぎ先の村で執り行われたそうである。事故から数日後、母親の遺体だけが村に運ばれ葬儀が行われた。通夜では母親の遺影の横に娘の遺影も一緒に並べられていた。病気で亡くなった中年男性と、事故で亡くなった母娘の命日は異なっていたが、通夜は偶然にも同じ日に行われた。女性の遺体を村に運ぶための車の手配などに時間がかかったからだそうである。両者の通夜は広場に面して向かい合うふたつの集会場でそれぞれ行われた。

翌日の朝、教会に二つの棺が運び込まれ、午前10時頃に合同で葬儀のミサが執り行われた。教会から墓地までの葬列にはそれぞれの棺に神父が一人ずつ同行した。村の中心にある教会から村の西端にある墓地に向かって、村の目抜き通りを葬列はゆっくりと進んだ。墓地まではいくつか道が交差しているが、各十字路に差し掛かるたびに交差点の真ん中に脚立を2つ置き、棺をそこに降ろした。棺の横で神父が祈り、棺を取り囲むように立ち並んだ参列者らもそれに合わせて祈った。十字路ごとに葬列は立ち止まり、祈りが繰り返された。墓地の前にある最後の十字路での祈りが終わり、葬列が墓地に向かって動き出した時、葬列の中にいた教師Dが他の男性と会話しているのが聞こえた。

「ほらやっぱり。今年はアニメーロをしなかったから、去年よりさらに多くの死者が出たのだよ」。

V-3 アニメーロに関する二つの解釈

アニメーロをめぐる村の女性たちの発言および教師Dの発言から、各人による解釈をまとめたい。2009年のアニメーロの再興、若い女性の突然の死、前年と比較して死者が増加したこと、それぞれの出来事が関連付けられて、アニメーロは「悪魔的なもの」としてタイタママの危険性を誘発するものであると女性たちをはじめ村の人々は解釈した。

一方、2010年に予定されていたはずのアニメーロが中止されたこと、アニメーロが中止された死者の日のあと立て続けに村から3人の死者が出たこと、このふたつの出来事が関連付けられ、アニメーロを中止したことにより死者が続出したのであると教師Dは解釈した。そして、アニメーロがタイタママを誘導することで生者があの世へ道連れにされることを防げるのだと、教師Dは自らの主張の確信を得たことがDの発言から読み取れた。

アニメーロを「悪魔的なもの」と解釈した女性たちと、アニメーロがタイタママの危険性を回避すると解釈した教師Dとは、アニメーロの役割に関する見解は全く正反対である。しかし、両者ともタイタママが生者をあの世に道連れにするということについての見解は一致している。すなわち、死者の霊魂タイタママが生者を死に至らしめる危険なものであるという霊魂観については共通の認識を持っているということがいえる。

アニメーロに対する人々の噂により、2009年に再興したアニメーロは2010年に中止となった。それ以降、2017年現在まで死者の日にはアニメーロは一度も開催されていない。しかし、2011年8月のフォルクローレ・フェスティバルにおいて新たな演目として、子供らによるアニメーロが披露された。次に、アニメーロがフォルクローレ・フェスティバルの演目になった経緯について述べていきたい。

VI フォルクローレ・フェスティバルの演目化

2011年10月末から11月初旬にかけて、筆者は再びA村で死者の日の追跡調査を実施した。その際もやはり、アニメーロは実施されなかった。しかし、教師Dがいうには同年8月に開催された地域のフォルクローレ・フェスティバルにおいて、Dの教え子たちがアニメーロの歌と踊りを披露したという。フォルクローレ・フェスティバルとは各地の伝統的踊りを子供たちが学校単位で披露するものであり、アプリアック県に限らず全国の行政単位で行われている。

毎年8月20日にアンタバンバ郡設立記念セレモニーが開催されるが、そのセレモニーの一環として子供たちによるフォルクローレ・フェスティバルが昼間に催される。また、このフェスティバルで地域の代表に選出されればアプリアック県の県都アバンカイなどで踊る機会もあるそうである。そのため、他の村や地域にはないような各地域独自の珍しい踊りが演目として披露されることが多い。このことを考えれば、他地域にはないA村独自の習俗であるアニメーロを演目として選ぶことは何ら不思議ではない。

教師Dによれば、2011年8月に開催されたフォルクローレ・フェスティバルで子供たちがアニメーロとして歌い踊った際には、頭蓋骨は用いなかったそうである。筆者は観察できなかったため詳細は不明であるが、前年2010年にこのフェスティバルを観察した際にはアニメーロは踊られていなかったことか

ら、2011年に新たな演目として踊られたことは確かである。そして、それを主導したのはやはり教師 D であった。

フォルクローレ・フェスティバルの演目として踊られることで、アニメーロは大きな変化を遂げたと考えられる。諸聖人の日および死者の日に開催され、頭蓋骨を持って一晩中歌い踊るという本来の形から変化し、郡設立記念日という非宗教的時間、また、死者の現れない昼間の開催となった。開催される場所も墓地ではなく、行政主体のセレモニーおよびフェスティバルという非宗教的場に変更された。そして、アニメーロの役割であるタイタママの危険性を回避するための要であるはずの頭蓋骨もそこから排除されている。つまり、フォルクローレ・フェスティバルの演目化により、死者の日に執り行われる死者儀礼としての位置づけ、タイタママの危険性の回避というアニメーロの本来のコンテクストから大きく変化したといえる。

VII おわりに

以上、A村のアニメーロおよびそれに関連する死者の日の儀礼、頭蓋骨と靈魂の関係性、アニメーロの再興と中止の経緯、フォルクローレ・フェスティバルにおけるアニメーロの演目化について民族誌的に記述してきた。

最後にごく簡単な考察を行いたい。先行研究の章で述べたエクアドルおよびスペインのアニメーロが煉獄の靈魂の救済を神やマリアに求める執り成しとして祈るのに対し、A村の他界観は煉獄ではなくコロプーナという実在の山であり、そこは死者にとって快適な場所であるため死者を救済する必要性はない。エクアドルおよびスペインの事例と異なり、A村のアニメーロは死者を救済する目的で歌い踊るのではなく、危険な靈魂タイタママから生者を守るという目的で実施されているという違いがあることがわかった。このことから、おそらくスペイン、カトリックを起源とする共通点はあるものの、A村の場合にはカトリックとは異なる他界観および死者観がアニメーロの役割に大きく影響しているといえる。

次に、アニメーロの再興と中止、フォルクローレ・フェスティバルの演目化という変容は、一見すると D が言っていたアニメーロが危険な靈魂タイタママから生者を守るという役割が打ち捨てられ、非宗教的なものへと変化したように見受けられる。しかしこの一連の出来事は、A村の人々が、生者を死に至らしめる危険な死者の靈魂タイタママという共通の死者観および靈魂観を保持しているからこそ起こった、信仰に基づいた人々の反応であったといえる。タイタママが生者をあの世に道連れにすると心から恐れているからこそ、教師 D はアニメーロを再興させたのであった。また、アニメーロは「悪魔的なもの」であると噂して結果的にアニメーロを中止に導いた人々も同様に、タイタママを真剣に恐れているからこそその反応であった。

そして、フォルクローレ・フェスティバルの演目にすることで教師 D は村の習慣を絶やさないという当初の目的を達成した。さらに、頭蓋骨を用いずに非宗教的場で昼間に子供たちによってアニメーロの歌と踊りが披露されることで、アニメーロは「悪魔的なもの」であると考えている人々が抱いている恐怖やアニメーロに対する疑念をうまく回避することに成功したと分析することができる。なぜなら、アニメーロがフェスティバルの演目になったことにより、夜、死者の日、頭蓋骨というタイタママが出現する条件が取り除かれたからである。これによって、誰かの死とフェスティバルで行われるアニメーロを関連付けて解釈することは困難となるからである。このことがアニメーロをフェスティバルの演目として変容させながらも継続・継承を可能にした重要な点であると筆者は考える。

冒頭で述べたように、ペルーのアニメーロに関する先行研究がないこと、理論的分析を行った先行研究がないことから、本稿では民族誌的記述に終始し、踏み込んだ理論的分析を行うことができなかった。また、実際にアニメーロを観察することができなかったことから DVD およびインタビューをもとに再構成したので、詳細まで把握できたとは言いがたい。今回の事例報告を踏まえて今後、理論的分析に取り組んでいきたい。

【謝辞】

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」（領域代表：青山和夫）およびその中の公募研究「アンデス先史文化の継承性に関する実証的研究：インカ時代～現代」（研究代表者：大平秀一、課題番号 17H05114）の研究成果の一部である。

注

- (1) 死者の日に歌と踊りの行列を行う人物およびその行列をさす。パクパコ (*pacpaco*) という夜行性の鳥の名前に由来する。パクパコが現れると死者が出ると考えられている。かつては成人男女が担っていたそうだが、祭りの主催者を希望する人が年々いなくなり存続の危機に直面していた。パクパンキートの習俗が失われることを危惧した村の教師が教え子の子供たちにパクパンキートをさせて、費用をかけないように行列を簡素化することで現在までなんとか継続させている。
- (2) カトリックの他界観には天国 (*Cielo*)、地獄 (*Infierno*) のほかにこの煉獄 (*Purgatorio*) という場所があるとされ、地獄に墮ちるほどではない軽罪を犯した人間が行くとされる他界である。アダムとイブに由来する原罪により全ての人間は罪人であるため、子供および聖人以外の一般の死者は煉獄に赴くとされる。煉獄において烈火に焼かれることで死者は浄罪され、最後の審判の際、最終的に天国へ行くことができるとされる。このようなカトリックの他界は聖書に明確に記されているわけではなく、時代とともに他界に対する解釈が変化するなかでこの煉獄という観念が誕生したとされる。その変遷についてはル・ゴッフ (*Le Goff*) が詳細な研究を行っている [ル・ゴッフ 1988]。
- (3) ノベーナ (*novena*) と呼ばれるカトリックの祈祷のひとつで、キリスト、マリア、聖人などに9日間祈り神への執り成しを願うこと、または死者が出た際に死後9日間喪に服し祈りを捧げることをさす。
- (4) ソーシャル・コミュニケーションとは、「企業が実施する事業を含めた企業経営の社会性の内容およびその意義を社会に伝えるコミュニケーション活動。また、その活動を通じて、企業および社会相互の持続的発展に寄与するコミュニケーション活動」を意味する [山崎 2016:42]。先行研究の紹介であるため、アニメーロを考察するにあたってソーシャル・コミュニケーションの視点が適切であるかについてはここでは論じない。
- (5) 歌を歌わないのになぜカントール (歌手) と呼ぶのかという筆者の問いに対してはカントール B からは明確な回答は得られなかった。先行研究の項で述べたように、スペインのアウロロおよびエクアドルのアニメーロは墓地で聖歌と祈祷を捧げる。筆者の推測では A 村のカントールもアニメーロに由来するのではないかと考える。それが後に分離してアニメーロが死者の日だけに歌い踊るようになり、カントールが毎週月曜日および死者の日に祈る人物に専門化したものの、名称にかつては歌を歌っていたという名残があるのではないかと考える。いずれにしても先行研究および史料がない現状では推測の域を出ない。
- (6) カントールはアンデス地域で一般的にみられる呪術師クランデーロ (*curandero*) とは異なるものである。カントールは呪術や治療等は行わず、山の神アプ (*Apu*) や大地の女神パチャママ (*Pachamama*) への祈りも行わない。カントールが担うのは葬儀、月曜日の墓参り、死者の日など死者儀礼のみであり、祈祷はカトリックのものである。
- (7) カテキスタとはカトリック伝道者で、一般信者が教会の正式な講座を受講しカトリック教義に関して正しい知識を持っていることが認められると伝道活動をすることが許可される。カントール B はカントールと呼ばれることを好まず、筆者がカントールの活動について質問すると「私はカントールではない、カテキスタである」と胸元の身分証を指し示した。またカントール B は祈祷の言葉を一字一句違わずに記憶しているにも関わらず、祈祷の際には必ず祈祷集をポケットから取り出しその祈祷の箇所を開いて祈りを唱えた。カテキスタの身分証とカトリック祈祷集によって B は自らが単なるカントールではなく、カテキスタであることの正統性を示し自ら権威づけを行っていた。
- (8) 聖水はカトリック教会で毎週日曜日に行われるミサで神父によって聖別されたものである。
- (9) 近年ではパソコンやデジタルカメラの普及により、DVD や CD などが安価で手軽に自主制作できるようになったため、村の祭りや行事を撮影して DVD として販売することがペルー各地ではよく見受けられるようになってい

る。

- (10) このインタビュー後に他の人々にも尋ねたが、途絶えていたのはせいぜい 10 年ぐらいだという者もいたので、途絶えていた正確な年数を確認することはできなかった。少なくとも 2000 年から 2008 年までは行われていなかったといえるだろう。
- (11) コロプーナはアレキパー県 (Departamento de Arequipa) に実在する標高約 6,400 メートルの高山である。村の名前は仮名であるため特定できないが同じくアプリマック県で現地調査を行ったバルデラマ (Valderrama) もコロプーナが他界と考えられていることを記録しており、A 村だけではなく当該県では広く共通した他界観といえる [Valderrama 1980]。また、インカ期にコロプーナが聖なる山として広く信仰されていたこともクロニカに記録されている [シエサ・デ・レオン 1979:140]。
- (12) A 村と同じくアプリマック県にある C 村の民話として聞いた話であるが、A 村のアリエーロが C 村の近くを通ると人々は彼らを恐れて遠巻きに罵ることがあったという。なぜなら、アリエーロは生者であるにもかかわらずあの世の麓まで行き来するからである。つまり、アリエーロはこの世とあの世を行き来する両義的人物、周縁的人物として畏怖の念に由来する差別の対象とされることがあったということである。
- (13) アグアルディエンテ (aguardiente) またはカーニャ (caña) と呼ばれるサトウキビの蒸留酒。
- (14) トウモロコシの発酵酒。
- (15) ケチュア語でタンタ (t'anta) はパン、ワワ (wawa) は子供を意味する。子供を象ったパンで、死者の日に死者に供えるための特別なパンである。ペルーでは広く見られる。
- (16) マテ (mate) は茶、マチュ (machu) は昔、古い、老人などを意味する。死者もマチュと呼ばれることから、マテ・マチュは死者の茶と訳すことができよう。
- (17) コチャは海、湖、泉などを意味する。
- (18) チュヤは透明という意味である。
- (19) 加藤によれば、葬儀の時にココの葉、酒、タバコを互いにあげたりもらったりするのは一種の交換・分配であり、死者の負債や金品の貸し借りを帳消しにするための行為である。何らかの貸し借りを清算しないまま亡くなると、死者があこの世に辿り着けずにこの世に留まってしまう、またはあの世で厳しい罰を受けると考えられている [加藤 2008 :444-445]。つまり、スーヨなどの死者儀礼において参列者が魔除けの力があるとされる酒、ココ、タバコなどを消費することは、死者の靈魂タイタママにあの世に道連れにされる危険性を避けるためだけでなく、帰郷した死者がこの世に留まらずに正しくあの世に再び戻っていけるようにする重要な役割があるということである。
- (20) ケチュア語でピスカ (pisca) とは数字の 5 を意味し、～スカ (-sca) は完了や場所をあらわす接尾語である。
- (21) 葬儀と月曜日の墓参りにおいては、カントールはカトリック神父の代理的役割を担っているといえるが、ピスカスカは土着的儀礼である。つまりカントールはカトリックの祈祷をあげるなど神父の代理的役割を担うが、同時に、神父が決して行わない村独自の土着的宗教儀礼も執り行うのである。カトリック的儀礼にしる土着的儀礼にしる、カントールは死者に関わる儀礼を司るといえよう。
- (22) 首都のリマなどでは死者の日に墓地に楽団が来てギターやバイオリンなどで伝統的な音楽を演奏することはあるが、A 村では死者の日に楽団が演奏することはないそうである。
- (23) ケチュア語でアヤ (aya) は死者、タキ (taqui) は歌を意味する。
- (24) この黒テントであるが、翌 2011 年に近隣の S 村で実施した調査でわかったのだが、本来は墓の上に立てて墓に日陰を作るためのものであった。S 村では死者の日の当日、墓の四つ角にマルキ (mallqui) を即席で植える。マルキとは木を意味する。それらのマルキの上に黒いマンタまたは黒いポンチョを掛けて墓に日陰を作る。死者は旅人と同じように日差しに苦しむため、日陰を作って休ませてあげる必要があるからだという。S 村に比べて人口の多い A 村では先述したように棚のように並んだ集合型の墓が多いため、マルキとマンタで各墓の上に日陰を作ることができない。そのため、現在のような墓地前の広場のテントに変化したと考えられる。また、墓の側にマルキ (木) を植えるという習俗はインカ期の習俗に関連する可能性がある。インカ王が出現したとされる洞穴パカリタンポトコ (Paccaritampotoco) を描いたサンタ・クルス・パチャクティ・ヤムキ (Santa Cruz Pachacti Yamqui)

は、洞穴の左右に2本のマルキを描いている [Sherbondy 1986:10]。また、インカ期にはミイラはマルキと呼ばれていた [アリアーガ 1984:458]。さらに、パチャクティ・ヤムキが描いたインカ期の宇宙観の図にもマルキが描かれている [Sherbondy 1986 :11]。シャーボンディ (Sherbondy) の研究によれば、マルキは祖先を表象するものであるという [Sherbondy 1986]。死者、墓、マルキの関連性についてはさらに考察する必要がある。

- (25) Dによれば、パヤ (*paya*) は王女や貴族の女性を意味し、ルミ (*rumi*) は石という意味であるという。
- (26) マヨルドモとは祭りの主催者であり祭りの費用を全て負担し、参加者を組織して祭りの準備を全て取り仕切る人物である。A村では年間を通して様々な祭りが開催されるが、どの祭りでも終わるとすぐに翌年のマヨルドモが決められる。次のマヨルドモに選出された人物とその家族は村の人々の協力を得ながら一年間かけて準備をする。多大な費用と労力がかかるため、マヨルドモを希望する者は数年前から貯金を始め、親族や知人に自分がマヨルドモになった場合に協力を得られるかなど事前の申し合わせをしておく。

参考文献

アリアーガ、パブロ・ホセ・デ

1984[1621] 「ピルーにおける偶像崇拜の根絶」(増田義郎訳)『ペルー王国史』、大航海時代叢書第II期16、pp.363-606、岩波書店。

Cevallos, Víctor Hugo

2016 “El cántico del animero va por las comunidades.” *El Universo*.

<https://www.eluniverso.com/vida-estilo/2016/10/25/nota/5873194/cantico-animero-va-comunidades>

(閲覧日：2018年2月19日)

シエサ・デ・レオン、ペドロ・デ

1979[1553] 『インカ帝国史』増田義郎訳、大航海時代叢書第II期15、岩波書店。

García Martínez, Tomás y María Dolores Ayuso García

2013 *Fuentes educativas sobre las fiestas tradicionales de invierno en la Región de Murcia(1879-1903)*. Región de murcia, Murcia.

稲村哲也

1985 「チュンカイ：アンデス高地のケチュア族牧民社会における死霊送りの儀礼」『社会人類学年報』11:151-166。

Jraudiovideo

2009 *Finados, Ecuador, Animero, Muertes, Penipe Ecuador*.

<https://www.youtube.com/watch?v=CATHueQQX1s> (閲覧日：2018年2月19日)

加藤隆浩

2008 「中央アンデス世界の二つの冥界」『説話・伝承の脱領域』(説話・伝承学会編) pp.431-449、岩田書院。

ル・ゴッフ、ジャック (Le Goff, Jacques)

1988 『煉獄の誕生』渡辺香根夫・内田洋訳、法政大学出版局。

Márquez, Cristina

2014 “El canto del animero continúa latente en Penipe.” *El Comercio*.

<http://www.elcomercio.com/actualidad/interculturalidad-muerte-cultura-penipe-ecuador.html>

(閲覧日：2018年2月19日)

Pacheco Bracho, Mónica

2010 “El Animero de Cahuasquí.” *Antropología: Cuadernos de Investigación* 10:137-145.

Palma, Ricardo

2007[1872] *Tradiciones Peruanas*. Peisa, Lima.

Sherbondy, Jeanette E.

1986 *Mallki: Ancestros y Cultivo de árboles en los Andes-Documento de trabajo 5*. Proyecto FAO - Holanda / INFOR / GCP / PER / 027 / NET, Lima.

Teleamazonas

2015 *Penipe: El Animero, Una tradición con 450 años de historia*.

<http://www.teleamazonas.com/2015/10/penipe-el-animero-una-tradicion-con-450-anos-de-historia/>

(閲覧日 : 2018 年 2 月 19 日)

上原なつき

2013 「ペルーの人々と曜日」『南山考人』41:49-52。

2014 「アンデスの死者表象」『名桜大学紀要』19:105-116。

Valderrama Fernández, Ricardo y Carmen Escalante Gutierrez

1980 “Apu Qorpuna: Visión del mundo de los muertos en la comunidad de Awkimarka.” *Debates* 5:233-264.

Veloz Ríos, Marie Lissette

2017 *La Identidad Iconográfica del Animero de Penipe y su Incidencia Cultural en Los Habitantes de la Cabecera cantonal de 18 a 30 años en el período junio – diciembre 2016*. Tesis de Licenciatura, Facultad de Ciencias Políticas y Administrativas Carrera de Comunicación Social de Universidad Nacional de Chimborazo, Chimborazo.

山崎方義

2016 「BtoB 企業におけるソーシャル・コミュニケーションの研究 : BtoC 企業調査による比較」『京都マネジメント・レビュー』28:39-54。

(2018 年 2 月 1 日採択決定)